

村嶋 千晶

MURASHIMA Chiaki

17世紀のオランダ絵画に表象された憂鬱 —フェルメール《眠る女》を中心に—

Melancholy in Seventeenth-Century Dutch Paintings: Focusing on A Maid Asleep of Vermeer

美術史領域

17世紀オランダ絵画の憂鬱

17世紀オランダ絵画の憂鬱

17世紀オランダ絵画の憂鬱

17世紀オランダ絵画の憂鬱

17世紀オランダ絵画の憂鬱

17世紀オランダ絵画の憂鬱

17世紀オランダ絵画の憂鬱

序
17世紀のオランダでは、従来の歴史画のほか肖像画、風景画、静物画、風俗画という絵画のジャンルが確立した。それらのなかで風俗画は、日常の一場面を題材にしながら、教訓的な意味が隠されていた。

すなわち、17世紀のオランダ絵画は、日常の有様をそのまま写し描いたわけではないが、当時のオランダの風習や社会的な状況が反映されていることを意味している。それは、ヨハネス・フェルメール（Johannes Vermeer, 1632–1675）の《窓辺で手紙を読む女》（1657–59）のように、手紙が同時代の絵画に描かれることで、モラルを好む市民たちの間に交わされ、当世の社会的な文化が絵画に取り込まれた上で教訓的な意味を示唆していることも関連がある。

このことを踏まえ、本研究で中心に据えるフェルメールの《眠る女》（1656–57）をはじめとする17世紀のオランダ絵画における美德と悪徳の表象について考察する上で、当時広く普及していたエンブレム集（寓意図像集）は重要な手掛かりとなる。たとえば、本研究で参照する、とくにヤーコブ・カツツ（Jacob Cats, 1577–1660）の『結婚』（初版1625）は、女子教育や結婚に的を絞って書かれており、女性がマナーや美德について学ぶために好まれたからである。

本研究では、フェルメールの《眠る女》に焦点を当て、17世紀のオランダ絵画における性的含意と憂鬱質との関連性について再考した。17世紀のオランダ絵画は、多くの作例において女性が描かれていた。それは、当世において家庭を守る存在であった女性たちが性的な欲求の対象とされていたことにも関連しているのではないかと見なすことができる。そこで、《眠る女》の先行研究について列挙していくことに加え、ヤーコブ・カツツの『結婚』を取り上げ、そこに表された恋愛観および結婚観について分析した。それにより、17世紀のオランダ絵画における性的含意と、ジェンダー美術史との位置づけについて論じた。

第1章 フェルメール《眠る女》とその先行研究

《眠る女》に関する重要なモノグラフとして、マドリン・ミルナー・カールの論考が挙げられる。カールは、《眠る女》の画中におけるモチーフと女性の姿勢や身振りが、その女性の恋の行方を表し、17世紀のオランダにおいてはそれらが悪徳を暗示する可能性について言及した。

その中で、カールは《眠る女》がアルブレヒト・デューラー（Albrecht Dürer, 1471–1528）の《博士の夢》（1498–99）から眠りの表現の着想を得た可能性を指摘している。カールは《眠る女》と《博士の夢》の双方における、眠っている人物あるいは目を閉じて眠るようにしている人物が表現されている点そのものに類縁性を認めたのである。

2000年代以降カールに代表される見方には与しない論考が発表されてきた。ウォルター・リートケは《眠る女》に関連づけて、オランダの家事使用人が、しばしば過剰な服装で批判されていたことを指摘している。1681年にアムステルダムで成立した奢侈禁止令では、絹の衣類や宝石を身につけることを明示的に禁止していた。そして、そのことには、オランダ各都市で、使用人と家族の恋愛を禁止する条例や、使用人が噂話をすると罰せられる条例などが制定されており、家事労働者に対する警戒心が強かったことが関係している。また、リートケは、フェルメールが《眠る女》を制作する際に着想を得た可能性のあるニコラース・マースの作例について比較分析を行っている。すなわち、1655年から57年までのマースの作例はすべて男性の訪問者に言い寄られたために自身の職業的義務を怠っている女性使用人が表現されており、他方フェルメールが描いた女性は、鑑賞者に意識が向かないように描かれていることよって、鑑賞者自身が女性の部屋を盗聴するか覗き見をしているかのような効果を得ているとリートケは指摘している。

フェルメールは、《眠る女》以降、《窓辺で手紙を読む女》や《恋文》など複数の作

品に鑑賞者が覗き見をしているかのように見せる空間構成を取り入れるようになった。《眠る女》の前景に斜めに置かれた椅子は、後景の部屋に視線を向かわせるために必要不可欠なモチーフである。椅子に加えて、前景に置かれた絨毯とテーブル、画中画、壁に掛けられた掛け軸の軸棒は、すべて鑑賞者の視線を後景の部屋に導く仕掛けとして機能している。

《眠る女》を所蔵するメトロポリタン美術館では、作品名を「A Maid Asleep」としている。17世紀のオランダでは、一割から二割の家庭で使用人が雇われていたが、使用人を描いた絵画にはどのような意味があり、所有され、鑑賞されたのか。17世紀のオランダでは「医者の訪問」や「恋しい」を主題とする風俗画が珍しくなく、それらは性的含意と憂鬱質の表現の両方において類縁性がある。その限りにおいて、《眠る女》は、17世紀のオランダ絵画のキーワードである恋愛や美德、悪徳のいずれとも相通ずる多義的な主題である可能性があることから、憂鬱質と女性表象、ことに女性の使用人の表現という点に注目して考察を加えるのは重要なことなのである。

第2章 《眠る女》の女性表現について
《眠る女》における描かれた女性の姿の最大の特徴は、肘を突いているところである。頬杖を突き居眠りをするポーズは、多血質、胆汁質、粘液質、憂鬱質という人間の四気質のうちの憂鬱質に関連があることから「怠惰」と同視され、眠っている人の姿に擬人化された。

気鬱な表現として、女性が頬杖を突くポーズは、恋の病にかかりやすい女性の体質を示すモチーフとして表された。

この肘を突いているポーズの作例の一つとして、デューラーの《メランコリアI》（1514）がある。フェルメールをはじめとして、17世紀のオランダ画家による作例と、デューラーの《メランコリアI》に共通している憂鬱質というのは、恋愛および性的含意ということにも結び付くものと考えられる。フェルメールが《眠

る女》を制作する際に、デューラーの《メランコリアI》を直接の着想源としていたかどうかは定かではない。しかし、既にみたように、頬杖を突くという行為が絵画表現において、憂鬱質を意味すると捉えることができることを踏まえると、同様の図像形式と関連性があることは確かであろう。先行研究でも指摘されているように、女性が眠っているのは、泥酔しているが故のことである。しかし、テーブルの上に置かれた林檎や飲みかけのワイングラスが、描かれた女性の恋の展開を示唆する。そこで、仮にデューラーの《メランコリアI》と《眠る女》に関連性があるとすれば、憂鬱さと恋愛に結び付きがあると考えるのは、むしろ自然ではないかと考えられる。

先行研究で《眠る女》としばしば比較されてきた作例として、ニコラース・マース（Nicolaes Maes, 1634–1693）の《怠惰な召使い》（1655）がある。マースの室内描写の仕方、細部にわたる再現描写、そして家庭内の光景における特別な親密さが、ピーテル・デ・ホーホ（Pieter de Hooch, 1629–84）やフェルメールといった画家たちに大きな影響を与えたとその他、「眠っている」というポーズを描いた作例として、他にヤン・ステーン（Jan Steen, 1626–1679）による《怠け者》（1650s）など挙げられる。

第3章 17世紀オランダ社会と女性表象
17世紀のオランダでは、市井の女性たちをめぐる美德や悪徳を主題とした風俗画が多く制作され、流布した。そのことは、同じように当時流行したエンブレム集と少なからず関係していた。「家庭の理想」が定型化されるにあたって、エンブレム集の内容は同時代の社会様態を映し出す鏡であった。

17世紀において、家庭の指南書がオランダ美術にとって重要であることは、以前から知られていた。その代表例が、ホラント州の法律顧問で詩人・モラリストだったヤーコブ・カツツによって1625年に上梓された『結婚』である。このエンブレム集は、17世紀半ば5万部以上が流通し、当時の出版事情からす

れば驚異的な成功をおさめたといえる。『結婚』の特徴は、それが男性向けではなく、女性向けであったことである。16世紀においてラテン語によるエンブレム集は読み書きの素養をそなえた限られた人びとの興味を引くにすぎなかったが、17世紀になると俗語に翻訳されることでラテン語の教育を受けていないネーデルラントの人びとも顧客となった。『結婚』は、乙女（Maeght）、恋人（Vryster）、花嫁（Bruyt）、婦人（Vrouwe）、母親（Moeder）、寡婦（Weduwe）の6つの章に分かれており、それぞれが女性の人生の特定の段階に捧げられている。カツツの包括的なアプローチは、人生のあらゆる局面における女性の美德、仕事、義務について説教するものであった。

17世紀のオランダにおいてエンブレム集は、若い女性の使用人が性的な対象として絵画に描かれるようになったことと関連がある。既述のとおり、エンブレム集は、俗語に翻訳されたことによって、ラテン語を習得していない市井の人々も読者にした。そこには、女性に対して向けられた教訓的な文章が多く含まれていたが、女性としてあるべき姿が書かれた内容は、同時にまた男性に対してもあるべき姿を示すものであった。

また、フェルメールやマースによる眠っている女性の作例は、女性表象と17世紀のオランダ絵画と密接な関係がある。17世紀の風俗画では、「見通しの空間」の演出によって、覗き見の心理とつながる。それによって、女性たちのいるプライベートな生活をのぞき見る際に覚える視覚的な昂奮にも通じているのである。

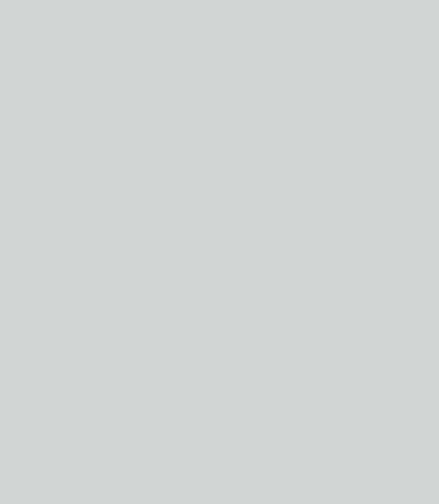
そして、フェルメールをはじめとした当世の画家の作例は、女性の魅惑に魅了された文化における中産階級の嗜好に応えるものであった。それと同時に、尾崎彰宏氏が指摘しているように、17世紀オランダ風俗画とは「寓意性と現実性のあわいにある虚構」ということができる。この概念は、17世紀のオランダ絵画における通義的なものであると同時に、2000年代前後にして解釈されるようになった性的含

意と女性表象というジェンダー美術史ということにも当てはめられるものである。

結
第1章では、《眠る女》の先行研究に関して、カールやリートケをはじめとして《眠る女》の女性の恋の展開と17世紀のオランダ社会との関係についての論考が発表された。

第2章では、《眠る女》の頬杖を突いているポーズが、デューラーの《メランコリアI》と関連があることについて論じた。第3章では、カツツの『結婚』と17世紀のオランダ絵画との関連性について論じた。そこには、女性に対して向けられた教訓的な文章が多く含まれていたが、女性としてあるべき姿が書かれた内容は、同時にまた男性に対してもあるべき姿を示すものであったことを示した。

以上のことから、《眠る女》に焦点を当てることによって、性的含意と憂鬱質という気質には大きな関連性があったと結論付けることができる。それにより、当時流行した風俗画に描かれた家庭内の女性が、オランダの市井の人々によって性的な欲求の対象とされ、それが17世紀のオランダ社会を反映させたものであったと見なすことができる。



ヨハネス・フェルメール《眠る女》1656–57年頃 油彩、キャンバス 87.6×76.5 cmメトロポリンタン美術館（ニューヨーク）CC0 1.0 [https://creativecommons.org/publicdomain/zero/1.0/]